

高田宏





高田 宏
ときどき旅びと

講談社

高田 宏 (たかだ ひろし)

1932年、京都生まれ、石川県育ち。京都大学文学部卒業。『言葉の海へ』で、大佛次郎賞と亀井勝一郎賞を受賞。

他の著書に『われ山に帰る』『五十歳、いざ!』『エッセーの書き方』『吾輩は猫でもある』覚書き』『遊びをせんとや』『雪日本 心日本』『雪 古九谷』などがある。

ときどき旅びと

昭和六十二年六月九日 第一刷発行

定価 一二〇〇円

著者 高田 宏

© Hiroshi Takada 1987 Printed in Japan

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目三十三 郵便番号二三

電話 東京三九四一三二(大代表)

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本は、ご面倒ですが小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-06-203470-0 (0) (学二)

ときどき旅びと

目次

旅から帰る日 7

I

加賀の冬 15

讃岐の米と水がつくる美酒 22

信州の宿 33

氷水とそうめん 46

フグ音痴 51

ふるさとの味 53

甘口辛口 58

拝領の盃 58 使えない大皿 59 猫めし 60 白夜 60 コッペパン 61

こんにゃくの刺身 62 人柄がつくる味 63 船上のビール 64 自炊 65

過ぎたるは 65

Ⅱ

春の船旅 69

小島の朝 72

島の旅、船の旅 81

夫婦の墓 85

北前船の海に 88

一生やらないこと 90

小笠原弁 93

島で見たことから 95

Ⅲ

生れ故郷京都 117

祇園界限 126

ふるさとへの両面感情 128

優しい誤解 132

東京の下宿 136

上高地 138

町に隠れている自然 140

農住都市 143

東京と津軽 144

もう一つの日本語 148

はきものの自由 151

自転車 153

スモークキング・エリア 154

郵便配達今昔 158

土地ごとの資料館 163

お星見 164

虫好き木好き 167

Ⅳ

雪見旅 181

雪国人 185

季節の重心 191

雪の文学散歩 199

日本は一つではない 214

あとがき 236

装幀 井上正篤

旅から帰る日

秋田県の角館を二日ばかりあるきまわって、秋田を経て山形県の酒田から船で飛島に渡り、もう一度酒田にもどって新潟県の岩船から粟島へ渡った。一週間の旅である。

七月某日、帰京の日。粟島の民宿で目がさめたのはまだ三時前だった。嗜眠癖のある私は東京にいと十時間でも十二時間でもねむる。眠りこそは幸せ、といったふうなのだが、旅先ではどういうわけか早く目覚めてしまう。おかげで角館なども地図に載っている道すべてをあるいてきた。夜明けから出歩くと朝食前にもひとまわりできるのである。一日が二日にもなるようで、そういう旅が一週間つづく気分としては半月も経った気になる。

それにしても三時前というのは早すぎた。前の日に、「日本一ハードなコース」をキャッチフレーズとしている粟島のサイクリングコースを走ったため疲れはてて早寝をしたせいだった。窓から港を見ていると、暗い海につきつき漁船が出てゆく。軽快な機関の音がウミネコの鳴く声とまじりあう。

忍び足で階段を下りて外へ出た。早起きの村人と話したり道にねそべる猫と遊んだりして村は

ずれまできると、海のむこうの本州の山から太陽が上ってきた。赤くて大きい太陽が見えているうちに山をはなれ海を輝かせる。私は前日あるきのこしていた海沿いの道を、道がなくなるところまで三キロばかりあるいてもどった。それでも朝食にはまだはい。

粟島からの帰りの船は、行くときとちがって高速船だった。これは、つまらない。速いだけを取り柄の船で、新幹線同様に窓も開かない密室にとじこめられる。甲板に出て海風に吹かれる楽しみは奪われている。行くときならばこんな船には乗らないのだが、旅の終りにはこれでもいいだろう。密室に坐っている私の中で、一週間の旅が急速に遠くなってゆく。夜明けの粟島の時間が、とても今日のこととは思えない。

旅の帰りは速い。村上から新潟への特急、新潟から大宮への上越新幹線。私は荷物しながら東京へはこばれてゆく。角館も飛島も粟島も、雨の流れる窓からの景色のようにぼやけてゆく。

それでいいらしい。旅はそうして私の中に沈んでゆく。旅のことを書くのは何日かあとになるだろう。普通の日々の暮しがまたはじまって、もう旅びとではなくなった私が旅の日々の私を自分とは別のものとして見るとき、ようやく旅が書けるのだ。今年は沖繩の南はずれ与那国島まで船で往復する計画もあるのだが、帰りの船でいくら時間があっても、船の中で原稿を書くことはしないだろう。

旅から帰ると郵便物が待っている。友人知人からの手紙、本や雑誌の小包、会合の案内、宣伝

パンフレット等々。これをつぎつぎ開いてゆく。返事のいるものには返事を書く。この作業が私にとっては、日々の暮しにもどってゆくためのリハビリテーションになる。帰りの乗りもので旅が遠ざかり、家に帰って郵便物を開きながら普段の日にもどってゆく。そして何日か先に、ときには何年か先に、旅が色上げされるだろう。

旅びとというのは、そういうものではないだろうか。『おくのはそ道』の芭蕉もそうであっただろうと私は思う。句はおおかた旅の中でできただろうけれども、『おくのはそ道』という作品は旅のあとの日々の暮しがあつてのものであろう。

粟島の民宿の台所で、大きな鯛に庖丁を入れているおやじさんと喋っていて、ちょっと痛いことを言われた。何しに来たのかと聞かれて、この島のことを書きに来たと答えると、一日や二日見ただけで書けるものかね、と彼が言う。そりゃ、そうだ。島に生まれて島に暮している彼にくらべたら、私はその何百分の一もこの島のことを知らない。

だが、その土地に住んで土地のことをよく知っているからといって、その土地を書けるものではない。おやじさんには言わなかったが、旅びとの目というものが要るのだ。普段の日々からはなれた旅びとが或る土地をあるいて、もう一度普段の日々に帰ってから、旅の日と普段の日のふたつが不思議な反応をする。そのとき旅の土地が、書けるかたちで生れてくるのではないだろうか。それは、その土地に住みついている人のものではない。

ただし、おやじさんの言うのにも一理はあるのだ。或る土地に長く住んでから、その土地を去った人が、年をへてその土地を旅びととしてあるくとき、その土地がいちばんよく描ける。そういう実例はいくつかある。すぐに思い出すのは太宰治の『津軽』である。第二次大戦の末期、太宰治がふるさとの津軽をあるいて書いたあの作品は、太宰治のなかでも最も私の好きなものであり戦争中の日本文学の数すくない果実の一つだと私は思うのだが、なにより、津軽という土地があれだけ書かれたものは他にないだろう。その『津軽』とおなじく小山書店の新風土記叢書の一冊として出た田畑修一郎の『出雲・石見』も、田畑が故郷を出て十三年ぶりの帰郷をして書いたものであり、これも田畑修一郎という作家の最高の作品であり、またあの土地を描いた最良のものと言っている。私もいつかは、ふるさと『加賀』を書きたい。その準備のように、このごろは、ふるさと雪国に惹かれ、雪国のことを折々に書いている。日本海を往来した北前船のことや、古九谷の時代にも、こころひかれている。

今度の旅から帰った日は、とりわけ郵便物が多かった。旅に出る前日まで八ヶ岳のふもとの仕事場に二週間こもっていて、そのぶんもたまっていたのだ。帰ったつぎの日は朝寝坊だったが、それでも夕方まで郵便物にかかりきって、一段落して近所の銭湯へ出かけた。

銭湯にはサウナがついている。サウナの中で、父親につれられた少女に会った。平安朝の女性のような長い髪を細身の背にたらしした少女だ。小学校四年生だという。この銭湯が好きで数キロ

はなれた目黒のほうから時々父の車でやってくる。父親が、これで十回ぐらいかなと言うと、少女は、今日で七回目と正確に答えた。大きな町の中で、小さな旅びとが小さな旅をしていた。私のなかに旅のゆりもどしが起っていた。

